

入研協 企画討論会②

思考力・表現力・協働性の評価を目指して

―九州大学 21 世紀プログラムの場合―

九州大学 基幹教育院 教授 林 篤裕

林：こんにちは。九州大学の林でございます。私は壇の上を移動しながらしゃべるもの
ですから、ピンマイクを用意していただきました。

前のお二人のご講演を拝聴しておりますと、非常に示唆に富んでおりまして、私の上
で何を申し上げれば良いかと悩むのではあるのですが、今回はこういうタイトル
にしました。今日の午前中のお話ですと、山内先生から表現力なんていうものはそんな短
時間に測れるものではないんだというお話がありましたが……、山内先生はいらっしゃる
んですかね、もうお帰りになられたのかもしれませんが。

実は、この話は以前にも何回かさせていただいたことがございます。2 年ぐらい前の中
教審の高大接続特別部会でも紹介させていただきました。先ほど調べましたら、この URL
はまだ生きておりましたが、URL の入力面倒であれば「高大接続特別部会 第 7 回 議
事録」で検索していただいても URL が出て参ります。それと、最近であればこの 5 月に、
今日は公開でございますので、高校の先生方はこの雑誌をよく読まれていると聞いており
ますが、「中等教育資料 5 月号」の中の 20 ページから 25 ページにも書かせていただい
ております。私の配付資料の一番最後のページにこれらの情報は載せておきました。です
から、これらでご紹介していることを 25 分でしゃべるんだというのが今日の私の役割とい
うことになっておる次第です。

それと、予告でございますが、つい 2 週間ぐらい前に北海道でも紹介させていただける
ことになりましたので、北海道の方は 8 月の末に札幌の方に来ていただければ、また私に
会えると、会いたいかどうかは別でございますが、ということにはなっております。

それで、まず九州大学を最初にご紹介しないといけないというふうに思っています。九
州大学は、1911 年に設立されましたので、今年で 104 年目でございますか。それで、古
い大学からすると 4 番目に設立された大学ということになります。昨日北千住の駅からこ
ちらに向かっておりましたら、大発見がございました。皆さんあそこをご覧になったかど
うか判りませんが、今回お世話になっているこの東京電機大学と東北大学はいずれも同
じ年に設立されておまして、今日の河添先生の慶應義塾大学を含めるとこの 4 つの中
では一番若い大学が九州大学だということになるかと思えます。

九州大学でございますが、学部が 11、学部生が 12,000 人、それから我々のような教員

が 2,100 人いる大学でございます。定員が 2,555 名で、比較しますと東大の 8 割、京大の 9 割ぐらいのサイズということになります。あと、東京電機大学の 1.3 倍ですね、慶応はさすがに大きくて、慶応の 4 割ぐらいしかございませんが、東北大は大体一緒ぐらいのサイズの大学ということになっています。

入試はどうなっているかという、一般入試というもので 92% ぐらいを取っていて、A0 入試で 7.6% を取っているというふうな規模の大学になっています。A0 入試というものをもう少し細かく見て参りますと、東北大学とは全く逆でありまして、ちまちまという言葉が悪いですが、小さな単位で 195 名、7.6% を A0 入試で募集しているということになっております。今日話題にさせていただくのは 21 世紀プログラムということで、26 名、全入学定員の割合からするとほぼ 1%、その入試をどうしているかということが今日皆さんのご関心事で、多少は参考にしていただけるのかもしれないというふうに思っている次第です。

入試の前に、まず 21 世紀プログラム、ひょっとすると 2 プロという風に略しているかもしれませんが、2 プロの理念というものを最初にご紹介したいと思えます。「専門性の高いジェネラリスト」というのが一番のキーコンセプトになっておりまして、それを支える 3 つの概念があって、全体として 21 世紀プログラムということになっております。我々のところには、先ほどお示ししましたように 11 の学部があるわけですが、文系と言われている 4 学部、理系と言われている 7 学部、どの学部で履修した単位も卒業要件にしますよと。ある程度の条件はありますけど、ここに所属の学生は 11 の学部を自分の興味・関心に応じて履修に行くということになっています。

多くの大学生の場合は、高校 3 年生までに専門を決めて、それに基づいて大学に進学してくるわけですが、21 世紀プログラムの学生は自分がやりたいことを最初の 3 年間は九大の中の 11 の学部で自由に履修してもらって、お椀の糸尻のようになっていますけれども、あそこが最後の 1 年でありまして、最後の 1 年間だけは自分の卒論を書くためにテーマを決めて、1 人の先生に付いて卒論を書いてもらおうということになっています。ですから、多くの大学生の場合は高校 3 年生で専門が決まるのですが、2 プロの学生の場合は学部の 3 年が終わった段階で専門が決まるということで、多くの学生よりも 3 年間遅く専門が決定していますから、大学院にも行って専門性を高めてほしいというふうに彼らには申し上げます。後で実績が出て参りますけれども、そういうふうなことになっているコースでございます。

学生がどのぐらいの学部で履修して卒業して行ったかという、1 学部だけしか履修していない者、7 学部も履修した者等々がございますけれども、大体平均すると 4 前後ですが、3、4、5 学部を履修して卒業して行っている者が多いということになっております。

卒業生は、先ほど大学院にも行ってねということをおっしゃっていましたが、現時点で卒業している 261 名を見ますと、暖色系の色が大学院進学で全体の 4 割弱と。真っ赤っ赤なのが九大の大学院、黄土色なのが国内の皆さんのところの大学院のどこかに入れ

ていただいている、また黄色は国外、地球上のどこかの大学院に行っているということになっています。寒色系で示した残り 50%がどこかに就職をしているというふうな卒業生の履歴ということになっておる次第です。

これはご紹介という意味で、1 期生から順番に何人入ってきて、どういうふうな交換留学等をやって卒業していったかというふうなものをまとめたものですので、必要に応じてご覧いただければと思います。

ここからが多分皆さんの今日のメインのお話だと思うのですが、我々のところで求める学生像というのはこのような 5 つのコンセプトを挙げております。自主性だとか、広く学びたいだとか、積極的に学びたいとか、語学を身につけようという意識があるんだとか、当然一定以上の勉強をしていくことというふうなことを挙げてございます。これも募集要項に当然うたってあります。

試験日程でございますが、A0 入試でございますので 9 月の下旬に、この日程は今の 1 年生の日程であります、今の高 3 生対象の日程はまだ公開されていませんので、今の大学 1 年生の、要するに去年実施した日程が載っておりますけれど、9 月の下旬、あのぐらいの期間に募集をして、去年は 99 名が志願して参りました。書類選考をして、10 月の中旬に第 1 次合格発表をし、去年は 73 名を合格にいたしました。11 月の初旬に 2 日間にわたる試験をします。これは後ほど詳細を申し上げますので、ここでは述べませんが、そして、11 月の下旬に合格発表をするというふうな試験をさせていただいております。

まず最初に、第 1 次選抜の書類選考でございますが、これは先ほどから誰が書いたか分からないとかいう話も出ておりましたが、志望理由書に、何で 2 プロに来たいのか、大学に入って何がしたいのか、そういうことを 2 面、文字のサイズは問いませんが、罫線が入っていますけど、2 面で書いてもらうということになっています。また、調査書は高校から出てくるもの自身であります。それから、活動歴報告、これも中学校以来どの様な活動をしていたかを書いてもらう。例えば先ほどもありましたけれども、生徒会をやっていたとか、海外に行っていたとか、何とかコンクールで 1 位を取ったとか、そういうふうなことの事実を書いていただければ良いわけで、なければならないと書いていただいで結構だと思っています。

我々が受け取った後の評価の仕方は後ほど申し上げますけれど、受け取った方としては、AP や先ほどご紹介したような求める学生像と照らし合わせて合致しているかどうかということ審査いたします。ですから、例えば F1 のエンジンが作りたいということであれば、それは工学部に行ってくださいということになりますし、薬剤師の資格が取りたいということであれば、それは薬学部ですし、21 世紀プログラムでは資格が取れません。薬学部の講義だけを集中的に受講したとしても薬剤師の資格は取れませんので、そういうご希望があるのであれば、それはもうそちらに行ってくださいしかないわけで、内申書の成績云々以前に、あなたは何がしたいかということを見させていただいているわけでありまして。施設の都合上、80 人がマックスなのですが、去年は 73 名ということにいたしました。

さて、先ほどペンディングにしました第 2 次選抜ですが、これが非常に重いというか、多分皆様のご興味の部分だろうというふうに思います。土曜日に 3 つのセットがあります。九大の教員が約 50 分間の講義をして、その先生が設定した問題を約 70 分でレポートという形で解いてもらいます。それを人文、社会、自然という昔の教養の 3 本柱に相当する内容で準備をして受験生に解いていただきます。

翌日は、前日聞いた 3 つのうちから 2 つを各自で選んでもらって、自分の考えを他の受験者と意見交換しようと。グループ討論という言い方をしていますけれど、まず講義 1 について意見表明したい人に手を挙げてもらってしゃべってもらう。次に講義 2 について、というように必ず 2 回は自分の意思表明をするようにしてもらって午前中はグループ討論を行います。前日教員から意見を聞き、2 日目の午前中には同年代の受験生の意見を聞き、では君はどういうふうなことを考えたんだということを、一つのストーリーにまとめてもらって小論文を書いてもらう。これは 270 分、紙のサイズは先ほどと同じですが、文字のサイズは問いませんが、3 面であります。これと並行して、個人面接を 15 分ずついたします。ここでは、君は海外で活躍したいと考えているようだけど何をやりたいのかというようなことが志望理由書の記載事項との絡みで出てくるということですね。

1 日目と 2 日目の間に夜がございます。当然今はインターネットとかが使えるわけですから、1 日目の講義の内容に即した話題を仕入れてくるという受験生がいないとも限りませんというか、ある程度いると思っていますが、そうすると、夜中に調べてきたことだけを、自説として滔々と述べて意見表明をしたかのように振る舞われるのは、我々としては本望ではありませんので、昨日聞いた講義のうちのここの話題について、このトピックでは議論するんだよという話題にタガをはめるとでも言うのでしょうか、「論題」と言うものを 2 日目の朝に提示いたします。つまり、夜中に予習してもそれはそのままは使えませんよということで、朝に提示するわけです。

この入試の面白いところは、1 日目と 2 日目の間で大体机の周りが友達になります。何で君は 2 プロに志願したの、私はこれがやりたいんだということを机の周りの受験生同士で意見交換していて、2 日目と 3 日目の間になると大体教室中が友達になりますね。君がやりたいと言っていたことは、教室の後ろの方で同じことを言っていた人がおったよとかいうようなことで、休み時間が騒がしい入試で、1 日目が終了するときようならと挨拶をして帰って行き、おはようと言って出てくるという、一種セミナーのような入試でございませぬ。

これは新聞等にもいろいろとインタビュー、取材を受けるのですが、あるときの新聞記事の見出しがこうなっていて、「A0 型 13 時間かけ選抜」というタイトルになっていて、私は実は駅で新聞を買ってこのタイトルを見た瞬間、自分で電卓をたたいて、120 足す 120 足す 120 足す 150 足す 270 割る 60 とやると 13 時間なんですね。やっている方としては、13 時間だというふうな認識はなかったのですが、13 時間だということになっています。

ちなみに、過去 5 年間の講義テーマはここに掲げたようになっておりまして、直近であれば「身の回りの確率論」とか「里地、里山の保全」とか、古い言葉は田舎の方に残っているという事で「古語は辺境に残る?」等、教員がこれらの講義をして、受験生にこれらの講義に基づいていろいろな意見を述べてもらったり、議論をしたりというようなことになっています。

ちょっと小さく書いてありますから大きくしますけれど、彼らからアンケートも取っています。無記名で。そうすると、楽しかったとか、いろいろな人と議論ができて嬉しかったというようなことを言うてくれるのですが、下の方に書いてありますけれども、会場を設営してくれてありがとうとか、お忙しい中試験をしてくださってという、本当に運営していて涙が出るようなことを、もしくはわざわざ教卓の方に来て挨拶をしてくれる受験生もいたりして、やっている方としては本当にありがたい入試というんですか、ありがたい若者がたくさん日本にはいるんだなということを感じる次第です。

ここまでが受験生として分かることですね。

これからは裏側ということで、皆さんがお聞きになりたい部分だろうと思っています。残りが 10 分ぐらいだそうですが、それで、第 2 次選抜には 80 名と言いましたけれども、80 名全員で議論はできませんので、第 2 次選抜をするときには 5 つの教室に分けます。分け方は、ア、イ、ウ、エ、オが一つずつのグループですが、なるべく第 1 次選抜の成績を均等化する以外に、男女の比だとか出身のエリアだとか、それから同じ高校の出身者がいては話がしにくいですので、そういうことをなるべく分けるようにしています。これは普通にシステムチックにとってもなかなか大変なのですが、割り振っています。

問題はその後でしょうね、多分皆さんがお聞きになりたいのは、第 1 次選抜の場合は、4 名の委員が、去年であれば 99 名の全志願の提出書類を読んで、4 段階で評価します。先ほど河添先生もおっしゃっておられましたけれど、自分としてはぜひ取りたい志願者を A とか、九大としてあまり取りたくないということであれば D という形で 4 段階評価をします。ただ、活動歴報告については A、B、C という 3 段階であります。いずれにしても段階評価を行うのが第 1 次選抜でございます。

第 2 次選抜は、講義、登壇する先生はお一人ですけれど、そのテーマを同じくしている先生をお二人付けていただいていますので、講義ひとつ当たり 3 名の教員がおられます。ですから、赤く塗ってあるのが主担当者であります。それ以外に同じテーマを持っている先生方がそのレポートとか小論文を読んで、A、B、C、D という形で評価いただくと。それから、面接とグループ討論に関しては、各教室に 3 名ずつ教員がおられますので、彼らにも A から D の 4 段階で評価をいただくということになっています。

A から C、もしくは A から D をどういうふうに評価しているかというのが多分多くの先生方のご興味であらうと思いますが、つまり、AAA、これはトップだろう。これは分かりますし、第 1 次選抜の場合は DDC が一番ボトムでありますから、トリプル A が一番上、1 と書いてあるところがそうですね。それから、ルービックキューブの左上の隅の AAA のとこ

ろが 1 番目で、DDC が 48 番目だろうと。AAB を次にするのか、ABA を次にするのか、BAA を次にするのかは、ルービックキューブのどちら方向により魅力的な受験生がいるかということを考えて順に付置して順位を付けていきます。当然 1 つのセルに複数の受験生が入ってきますから、それは同位、同じ順位ということで、同位を加味した上の順位を付けて、前の方に位置している受験生から順番を振っていくということになる次第であります。

ということで、21 世紀プログラム、まずこのご紹介でございますが、「専門性の高いジェネラリスト」ということで、既に 15 期生までが入っております。11 学部ありますから、その中で自分の興味・関心に応じた教育を受けていच्छいという風なことで、よく皆さんからご質問を受けるのですが、彼らは自分一人で自分の興味・関心のある学部に行くわけですね。そこには、例えば物理のところに行ったら、本来の理学部物理学の学生がたくさんいるところに一人で行って、自分がこれを受けたいんだと。周りにはそれを専門にしている学生がいるわけですが、一人で行って、どうしてもこれを受けたいと。そうすると、本来そこにいる学生は、あいつは誰なんだ、見たことないぞということなのですが、何か質問が非常に鋭いとか、2 プロの学生は面白いぞということで、本来いる学生にも効果がありますし、当然単位を取りにその教室に行っているわけですから、彼ら自身はやる気があってその教室に行っているわけですから、相互にプラスの効果がある「カナリア効果」というふうな呼び方をしていますけれども、そういうふうな形で今我々は 15 期生までを受け入れている次第です。

ここは入研協ですけれども、先ほど倉元先生もおっしゃっておりましたが、教科学力というのはぜひ我々も聞きたいと思っていますから、試験の中に英語だとか一部いろいろなことを問う問題をレポートの一部に課しております。その中で、多様な学生を発掘する手段を何とかやろうといろいろな毎年工夫しながらやっておる次第であります。

次のスライドにありますけれども、大体今 4 倍ぐらいの倍率の受験生に来ていただいています。前のところに改革と書いてありますけど、あれは 5 浪、5 年の浪人生までを受け入れるように変更したらちょっと倍率が上がったのですけれども、その後は大体 4 倍ぐらいになっていますけれども、私個人は 2 プロというのは結構面白いと思っていますから、まだご存じないエリアの方にぜひ受験していただきたいなと思っていますし、昨日のセミナーにもありましたけれども、A0 入試というのはなかなか皆さんにきちっとご理解いただけてない部分もあるように私個人は感じていますので、こういうふうな入試も A0 なんだということをご存知ってほしいということで、A0 入試の広報もしたいなと思っています。

これが合格者の出身エリアですが、九州アイランド、島の中が多いのですね。どうも海峡を渡った山口から向こうの方からはなかなか来ていただけてない。東北にちょっと学生を譲っていただければありがたいのでございますが、ただ、海外だとか大検等経て来ている学生も若干名いるのは事実であります、もうちょっと島の外にも広報をしなければというふうに思っておる次第であります。

そして、まとめであります、先生方の大学でも提供されている学生への入学直後の第

1 日目の講義を高校生に提示して、こういう学問があるんだよということを彼らに振って、どう考えるんだということをゼミでやったり、それを文章にまとめてみたりレポートにしたりということで、大学の教育では普通に行われていることを試験として実施しているということです。中教審答申が昨日あたりからずっと話題に出ていますけど、思考力、表現力、協働性ですか、これぐらいは少しは測れているのかなというふうに思って、今日のタイトルの一部にさせていただきました。

先ほど倉元先生のお話にもありましたが、高校の現場に対して過度なリクエストを出すというのは、私もあまり良いことではないと思っていますので、日ごろあなたは高校で何を考えているのですか、大学に何を求めているのですか、そういうことを彼らに問う。それは別に対策だとかそういうものじゃなくて、ですから、私は高校の先生方には、11 月に 2 日間だけ生徒を我々のところに来させていただいて、同じようなことを考えている、同じように大学に夢を持ってくださっている受験生と一緒に話をして、君はどこまで彼らと一緒に議論ができるかを測らせてもらえませんか、対策は要りませんよというふうに申し上げております。なかなかその辺のご理解が、私の説明が下手なのかもしれません。

見ていただいて分かるとおおり、非常に手間がかかります。受験生側が 13 時間缶詰めになっていますけど、我々は 13 時間どころではありませんで、相当前から準備を始めないといけません。当然ですが、委員の選定とかいろいろご依頼をすること等には非常に……、別にここで苦勞と言っても仕方ないのですが、いろいろと工夫がございます。それから、今回の答申にもありましたけれど、不合格になった受験生に対しても、キチンと説明できないといけませんから、評価方法だとか公平性は非常に重要だろうというふうに思っています。

じゃあ、手間がかかるからやめるのかということになると、それは私は違うというふうに思っています。“良い”という観点は先生方それぞれによって違うので、ダブルクォーテーションで囲ってありますけれども、一教員である私が“良いな”と思う学生が来てくれるわけですし、一応理念に基づいて志願してくれているわけですから、そういう学生がいる限りは改良を続けながらこのプログラムを残していきたいなと思っています。

これも質問が出るかと思って先に書きちゃいましたけれど、第 1 次選抜と第 2 次選抜で成績に相関が小さいことが例年起こります。つまり、第 1 次と第 2 次で別の評価をしていますので、こういうことになるのだと考えているのですけれども、なかなかその辺のご理解がないように思っています。ですので、我々が絶対注意しないといけないのは、第 2 次選抜の成績を見るまでもないという形で第 1 次選抜の合否をラフにやってしまうと、第 1 次の成績は芳しくない受験生が第 2 次の方で良いパフォーマンスを示すという受験生もいますので、ぜひ第 1 次でも“良い”学生を決して逃さないようにということを念頭に合否を決めている次第であります。

今回の中教審答申の 2 年前に高大接続特別部会でご紹介したと先ほど申し上げましたけれど、今回の中教審答申の中でこういうふうな評価方法が良いんだというか、一つの例示

で挙がっているわけですが、これが今後の主流……、傍流かもしれませんが、になるかと言われると、私は結構まだ検討する必要があるだろうなというふうに思っています。それはなぜかという、もうお分かりの通り、上にも書きましたが、うちは定員が 2,555 名ですが、受験生は 8,000 名いますけれども、全員に面接・小論文を課すというようなことは全く普通には考えられませんので。今のままでは。ですから、その辺はどうなるのだろうというのは、現在私もここで申し上げられるような知見は持っておりません。

ということで、皆様方にどの程度参考にしていただけるかは判りませんが、我々が 15 年間やってきたことの一部を紹介させていただいた次第であります。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)